

第34回 消防団員意見発表文集

令和2年2月9日（日）

東京消防庁消防学校

共催 一般社団法人 東京都消防協会

東京消防庁

目 次

第一方面支部代表	麴町消防団	団員	小野 名利子	
	地域の自助、共助力向上を目指して			…………… 2
第二方面支部代表	荏原消防団	班長	松本 常広	
	T w i t t e r 活用でイメージアップを			…………… 4
第三方面支部代表	成城消防団	分団長	原田 明美	
	消防団員充足率100% その先へ			…………… 6
第四方面支部代表	杉並消防団	団員	松田 敬子	
	災害大国日本で被災者0（ゼロ）の奇跡！をめざす！			…………… 8
第五方面支部代表	小石川消防団	団員	菊岡 里美	
	土地っこ消防団員を目指して			…………… 10
第十方面支部代表	光が丘消防団	団員	河村 圭乃	
	芽生えた夢			…………… 12
第六方面支部代表	荒川消防団	団員	平田 敦義	
	父親と子どもを育てる消防団			…………… 14
第七方面支部代表	江戸川消防団	団員	神尾 昭央	
	消防団員と地域の連携が自治体の未来を創る			…………… 16
北多摩支部代表	国分寺市消防団	団員	角田 賢祐	
	操法大会で気付いた地域防災力の重要性			…………… 18
西多摩支部代表	あきる野市消防団	班長	木崎 貴之	
	家族あつての消防活動			…………… 20
南多摩支部代表	多摩市消防団	団員	柴田 洋佑	
	消防団と家族について			…………… 22
島しょ支部代表	青ヶ島村消防団	団員	佐々木 祐治	
	「我らの島は我らで守る」の言葉を胸に			…………… 24

※発表順は当日実施する抽選会で決定します。

地域の自助、共助力向上を目指して

第一方面支部代表

麴町消防団 団員 小野 名利子

消防団に所属する前の出来事です。地元のカフェにいた私は「ドスン」という大きな音に驚き振り向くと、人が倒れ、その周りに数人が駆け寄っていました。あれだけの大人がいるんだし、任せて大丈夫だろう…そんな安易な思い込みから行動しない選択をしてしまったのですが、違和感を感じました。人だかりの方向からは掛け声ひとつ聞こえません。さすがに気になり近づきました。隙間から見えたのは、高齢の男性が、真っ青な顔で嘔吐し、床に倒れたままピクリとも動かない姿でした。残念な事に人だかりは、皆、見物人です。アルバイトの店員だけがタオル片手に右往左往しています。私はハッとしました。気づけば倒れた男性の脇で、大丈夫ですか？と意識、呼吸の有無を確認し、近くにいた数名の男性に支援をお願いしていました。

咄嗟の行動はどこから来たのか？それは紛れもなく客室乗務員時代に培ったもので、当時はフライトの度に緊急事態を想定し知識を確認します。例えば、救急車が呼べない上空で急病人が発生したらどうするか？をパーサーから質問され答えます。時には狭い機内で酸素吸入が必要な事もあります。

客室乗務員にとって備えるとは、緊急時に躊躇なくすぐに動ける状態を作っておく、ということです。そのために一例ですが、フライト中のイメージトレーニングがあります。これは、お客さまにはとても話せない最悪のシナリオをイメージしながら適切な対処の段取りを頭の中で想像するものです。もちろん笑顔のままです。緊急時に沈着冷静を保てるのはこのおかげです。目の前で倒れた男性との遭遇で客室乗務員の訓練が活きたとは思ってもよらないことでしたが、同時に訓練のすごさを再認識しました。

そんな出来事の数日後、防災には女性の視点も必要だから消防団に入団しませんか？と声をかけられたのです。入団に際して何の基礎も無い状態でしたが、私の経験でお役に立てるのなら、と入団しました。入団後の研修で、最も納得し心に響いたのが、事故や災害発生時の自助、共助の重要性です。例えば、救急車が到着するまでの数分間。応急処置次第で、目の前の人々の人生、周りの人々の人生が変わる可能性があるということ。助けを待つ受身の姿勢だけではダメで、そこに居合わせた人々が協力し、助け合うためにも、まず自分の命、安全を守ることが大前提であるということが記憶にしっかり残っています。

まだ始まったばかりの消防団活動ですが、自助から共助、そして公助への橋

わたしを担う地域の要を目指し、3つを念頭に置き活動を心掛けます。

1、知識を持つ、2、日頃から備える、3、町を知り地域の人々をつながる
千代田区は、住民の9割以上がマンションに住んでいます。転入や転出が多い
うえ、ご近所づきあいが少ないご時世でお互いの顔が分かりにくいのが悩みで
す。そんな事情を抱える町だからこそ、防災訓練や町のお祭りで、顔を合わせ
学び合う機会があります。防災訓練指導で特に印象深かったのは、中学生向け
の 応急処置訓練です。雑誌や傘など身近なモノを使った処置の実践で、アイ
ディアを出し合いながら楽しく取り組んでいました。

私達消防団員は、同じ町で暮らし、活動する仲間として人々の自助、共助力
が高まるよう声をかけ支援しながら、地域のみんなで守る安全と安心の実現に
向け、責任を持って今後も貢献してまいります。

この度は、このような貴重な機会をいただき、誠にありがとうございました。

Twitter活用でイメージアップを

第二方面支部代表

荏原消防団 班長 松本 常広

私が消防団に入団したきっかけは東日本大震災でした。未曾有の大災害を前に、地域防災の必要性を痛感しました。そして、自分自身が住宅街で独立開業することになり、自由な時間ができたことから6年前に入団しました。消防署のウェブサイトを見て入団の申込みをしたのですが、紹介によらない飛び込み入団は珍しかったようで、当時の分団長が驚かされていたのを覚えています。私のような飛び込み入団をどう増やすか、これが、本日私が申し上げたい点です。

消防団にとって団員の充足率向上は常に大きな課題であり、様々な方法が提言されていますが、実際の入団経緯としては、町会・自治会関係や団員からの紹介、すなわち既存の人間関係によるものが多いのではないかと思います。

一方で、内閣府の「社会意識に関する世論調査」によれば、6割以上の人が「社会のために役立ちたいと思っている」と回答しています。そしてその内容としては自主防災活動、災害援助活動が上位に挙がっています。そうであるならば、我々がアプローチすべきは、従来取りこぼしてきた層、地域コミュニティとの関係がまだ希薄な転入者、若者ということになるのではないかと思います。

ところが、ここで大きな課題があります。消防団のイメージの問題です。残念ながら消防団について悪いニュースが報じられることは少なくありません。

また、既存団員によるインターネット上でのネガティブな情報発信もよく見られます。訓練に無理やり参加させられた、飲酒を強要された、いじめがあるなどが散見されます。このような情報を見て入団しようと思う人はなかなかいないのではないのでしょうか。

消防団のまつわるネガティブなイメージを払拭し、地域防災のために熱心に活動するカッコいい集団であると知ってもらうことが必要であると考えます。その際、活用を提言したいのがTwitterによる情報発信です。

近年、若年層を中心に、テレビよりもインターネット経由で情報収集する人が増えています。中でもSNS、ソーシャル・ネットワーキング・サービスで情報収集を行う人が増えています。昨年の台風19号上陸の際、かなり多くの自治体のウェブサイトが、住民のアクセス集中により閲覧しづらくなりました。その際、一部の市長や地方議員が自身のTwitterやFacebookで避難施設の情報を発信するという動きが見られました。そしてこれらの情報が、リツイート、シェア、すなわち情報共有機能により拡散していったのです。SNSの情報拡散効果は、何年も前からマーケティングの分野で注目されています。特にTwitter

の拡散力は強く、一つのつぶやきが何万人もの目に触れることも少なくありません。

単なるインターネット上の情報発信ということであれば、消防団も質の高いウェブサイトを作成しています。しかし、その情報も拡散され、より多くの人に知ってもらえなければ宝の持ち腐れとなってしまいます。そこで、積極的な情報発信。拡散を行うべく、各消防団レベルでの Twitter の活用を提言します。

日々の活動内容を発信することで地域の方々に我々のことをもっと知って頂くことができます。また、特に台風は、発生から上陸まで時間があり、上陸前に市民の災害情報に対するニーズが格段に高まります。そういったタイミングで避難の際に気を付けること、災害対策資機材の使用方法、あるいは消防団員が水害時にどのような活動を行っているかなどをたとえば動画を交えながら発信すれば拡散される可能性が高まります。災害時に市民が必要としている情報を発信することを通して、消防団に興味を持ってもらう。その上で団員募集につなげるのです。

このように、Twitter を活用し、正しく我々の活動を理解して頂ければ、より多くの市民に参加して頂ける組織になるのではないかと考えております。更なる消防団活動の発展を願い、私の発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

消防団員充足率 100%その先へ

第三方面支部代

成城消防団 分団長 原田 明美

私は平成3年成城消防団で初の女性団員として、第一分団に入団しました。第一分団は年齢・男性女性の仕事を分けること無く指導をしてくれ、ホース巻きをはじめ規律等団体行動の大切さを学びました。家庭もあり、仕事もしている私でしたが、家族の支えもあり、温かい環境の中で団員を続けることができました。その経験を基に、平成24年成城消防団初の女性分団長になりました。

ところが、いざ分団長となると分団運営は容易なことではありません。まず、1つ目は、仕事も個性も違う団員とのコミュニケーションを図ること。

2つ目は、訓練場所の確保です。その当時、NTTの駐車場をお借りしてポンプ操法大会に向け訓練をしていましたが、今後使用出来なくなるとの事。これは一大事でした。

訓練の度に場所が変わってしまう事は選手たちも集中出来ません。ホースが真っ直ぐ伸ばせる場所、全力で訓練が出来る場所を探さなければいけません。

3つ目は、団員定数の確保です。年々入団者が減っている中、どの様に増やしたら良いのかが課題でした。この3つをどう解決するか、分団長として悩み、そして行動に移しました。

1つ目の団員とのコミュニケーションを図ることは、訓練時や点検時に一人ひとりに声を掛け、話しやすい環境作りに専念しました。

2つ目の訓練場所と3つ目の団員確保ですが、地域の会合には出来る限り出席し、その都度、訓練場所と団員募集を訴えていました。そのことが功を奏したのでしょうか、都立高専から、生徒に救命・防災に関することを指導して欲しい、その為にも消防団の訓練で学校を使用して構わないと申し出がありました。最高の訓練場所が確保出来ました。指導後には生徒に、年齢が達したら地域の消防団に入団するよう勧めました。

それに加え団員募集では、会合の折に私がたどたどしく消防団について説明するものですから、「私にも出来る。」とってくれるたのでしょうか。女性2名が、即入団してくれました。一方男性も震災の事もあり関心を持つ方々が入団し団員は増えました。このように地域の協力のお陰で何とか3つの課題を解決することが出来ました。

東日本大震災では私達の街は大きな被害はありませんでしたが、揺れが収まった後に鐘を鳴らしながら被害状況を見て回りました。数日後、地域の方から「我が家は皆仕事に出て家は一人、心細いところに鐘が聞こえ安心した。」と感謝されました。地域の役に立った事を実感し、とても嬉しかったです。

その後、平成28年、私は団本部の分団長になりました。次の課題は団員の充足率向上でした。現在、充足率を高めるために成城消防団は消防署と連携し地域の町会自治会に広報活動を行い、各行事をはじめ大学のクラブ、学生専用マンションに消防団員募集のチラシを配布し、説明に行くなど積極的に団員確保の為の広報活動をしています。皆の日々の努力の甲斐もあり、令和元年10月に成城消防団は基本団員のみで、充足率100%を達成することができました。

しかし、この数字に甘んじることなく、団員を増やす方法はないか。今年は東京2020大会において一層の警戒が必要になります。そこで私が考えついたのがオリンピック聖火ランナーとして消防団をアピールする事。応募しましたが残念ながら当選通知は来ませんでした。しかし、これから私が出来たことは未来の消防団に繋げるランナーとして消防団員の重要性、団員の充足を事業所も含めた地域の方々に、もっと理解と協力が得られるように消防署と共に取り組んでいくことです。そして広報活動のチャンスがあれば、これからもチャレンジしていこうと思います。

災害大国日本で被災者0（ゼロ）の奇跡！をめざす！

第四方面支部代表

杉並消防団 団員 松田 敬子

“ガタガタ…”「あれ？地震・・・」と思った瞬間、突如激しい揺れに襲われました。

机の上の物は飛び散り、書棚や机は大きな音を立て暴れ出しました。

東日本大震災。学部卒業間近の3月11日、私は岩手大学の研究室にいました。

ライフラインが途絶え、スーパーからはモノが無くなり避難所に身を寄せました。

家族とも連絡取れない中、友達の携帯で見たニュース映像の衝撃で、声も出ませんでした。

津波。一瞬にして、建物も道路も人も街も、悲痛な叫びと共に丸飲みにし、かつて私が見た美しい三陸海岸の街並みは在りませんでした。

震災後、復興活動が多く報道され、自衛隊・消防署と連携し、避難誘導、救助、消火活動等、昼夜問わず、わが身を賭した「消防団」は、映像や活字を通して、強く、私の心に焼き付きました。

そして学生の私も何か…と思い、「頑張ろう！岩手」の一環として、JA 全農いわてが募集するキャンペーンガールに応募し、農畜産物を国内外様々な場所で復興イベント・PR 活動を行いました。

大学院生との両立はとても大変でしたが、刻まれた念いからやり遂げる事が出来ました。そして、多くの人との関わり合いを通して、ボランティア精神が芽吹きました。

5年後…東京に越し、地元阿佐ヶ谷の分団長の誘いで杉並消防団に入団し、この3年間で多くの活動に参加し学びました。

防災訓練、応急手当の指導、広報、台風警戒、本番さながらの水防訓練。実際の火災に3回出動し、黒煙と共に燃え上がる炎、鼻を衝く匂いに、私は恐怖を覚えながらも必死で支援しました。

また、応急手当指導員の資格を取得。

東京オリンピックで役立てばと思い、手話を学び、半年語学留学もしました。

悔し涙の銀メダル、昨年選手として嬉し涙の金メダルの消防操法大会。

繰り返し、繰り返し行われる操法の訓練は、私にチームワークの大切さ、自身の未熟さ、操法の奥の深さを教え、更に消防団活動を広く啓蒙しなければ。と言う念いを作り上げさせたのです。

「消防団」

言葉の響きから、消火活動だけの印象を与えがちですが、その活動は多岐に渡り、「災害大国日本」に暮らす我々日本人にとり、その存在意義と活動は重要です。

今年開催される「東京オリンピック」

「安全・安心なオリンピック開催」は、日本人のみならず、多くの外国人が安心して日本に来る為にも、消防団活動は要です。

しかし、少子高齢化、人口減少、雇用形態の変化等から、「消防団員の減少と高齢化」は、災害時に「救える命」に苦渋の順位を付ける厳しくも悲しい現実を更に広げようとしています。

地域によっては、初期救助・消火は消防団しかできません。多くの震災や災害では、中心となり、活躍してきました。

この消防団の存続は、全国民が真剣に取り組むべき重要課題です。

この課題解決には、一人一人が自分の命を守る術を知る為、学校教育に「防災」を主要科目として取り入れる事が必要だと私は考えます。

既に一部の学校では行っていますが、更に発展させ小学生から大学生まで、環境の変化に伴い、次世代の子供に興味や知識・技能を持たせ、育て行くのです。

その一歩は、その地域に合った実戦に近い訓練や女性団員の役割の拡充、広報活動等、日常の草の根活動からです。

今年7月には東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。

「私にできること！」(What I Can Do)

「私がやらねばならないこと！」(What I Have To Do)

(※手話も入れる)

先輩たちから受け継いだ技術と念いを次世代の団員に伝えます。

「世界一安全で、安心な都市 東京」の実現のために！

そして私は学び続け、“災害大国日本で被災者0（ゼロ）の奇跡！”を私は見たい！

土地っこ消防団員を目指して

第五方面支部代表

小石川消防団 団員 菊岡 里美

ホースは引き摺らない！！

私が小石川消防団に入団したのは、東京都消防操法大会の本番3ヶ月前、梅雨明け直前のまさに訓練に熱が入っていた時期でした。真剣で迫力ある訓練に戸惑いつつも、気がつくとならぬ夢中で選手の動きを追っていました。

水を含んだ消火用ホースはとても重く、引き摺らないように一本運ぶのも必死です。さらにそのホースを手で巻くのは大変で、男性に比べて力がないため、先輩方から教わりながら、夢中で何本も巻きました。

ある時、ホースを巻く私の姿を見たベテラン団員が、「女性にホースを巻かせて、お前たちはなにをやっているんだ！」と男性団員を叱ったことがありました。私がすかさず、「ホース巻を覚えたいんです！」と返すと、「珍しいね、すまなかった。」とあたふたされたエピソードは、いい笑い話になりました。

訓練は平日の夜7時から、まさに住民の帰宅ピーク時間です。地域住民にとっては、迷惑で煩わしいに違いありません。私たち支援団員は、選手が訓練に集中できるよう、誠実な態度と振舞いで通行人や車両に理解していただき、安全に誘導することが求められます。地域の方に、「ご迷惑をおかけします。」と声をかけると、「今年も頑張ってるね、応援してるよ。」と言葉を返していただきます。このように、地域住民の方々に受け入れられ、人通りの多い住宅地の道路で、放水訓練ができる環境こそ、これまで諸先輩方が培ってきた小石川消防団の実績そのものなのでしょう。自分が消防団員になったことを実感するとともに、感謝と責任感で、姿勢が正されます。

私の所属する小石川消防団は、過去に何度も都大会で入賞を果たしているため、訓練はとても厳しいものでしたが、団員一丸となって、悲願の優勝を目指し、走り抜けた夏でした。

そして、訓練の成果を発揮するべく挑んだ都大会当日。会場の雰囲気にも圧倒され、張り詰めた緊張感で、鼓動は高まり、呼吸も忘れるほどの時間でした。結果は残念ながら、優勝には届きませんでした。団長が声を詰まらせながら、たった一言だけ、「皆よくやった。」との労いの言葉に、選手も指導員も達成感に涙を堪えきれず喜び合いました。私も団員として、この感激を分かち合えたことは、一生の財産です。仲間を誇らしく思います。操法訓練を通じて、「チームの一員として自分に何ができるか。今、何をすべきか。」を常に考えて行動し、地域に貢献することの大切さを学びました。

その後も様々な消防団活動に参加しました。戸別訪問の防火診断の際には、

合同町会主宰の盆踊りを通じて、顔と名前が認知されていたため、一人暮らしの高齢女性からは、「顔見知りの女性団員がいると安心だよ。」と言ってもらい励みになっています。

そして特に団員になってよかったことは、地域の一員、土地っこになれたことです。進学で上京し、小石川に親族はおりませんが、今は、毎朝、挨拶を交わす地域の顔見知りや信頼できる仲間ができ、とても心強く、私の方こそが、恩恵を受けています。消防団に入って、地域の方々に守られ、安心して都会で暮らすことができます。都会で一人暮らしの女性は、いざという時に不安ですが、消防団員になれば多くの仲間と出会い、活動以外でも助け合うことができます。これからも消防団活動に積極的に取り組み、土地っこ消防団員として、地域にお返しできるよう、楽しみながら頑張ります。
楽しいです、消防団！

芽生えた夢

第十方面支部代表

光が丘消防団 団員 河村 圭乃

今、私には東京消防庁の消防官になりたいという夢があります。

私が最初に消防に関心を持ったのは9歳の時です。小学校でもらった消防少年団の案内になぜか運命的なものを感じ、応募締め切りが過ぎていたにも関わらず強引に入団させてもらいました。活動は新しいことの連続で、心臓マッサージなどの応急救護訓練や初期消火訓練を通して人の命の大切さを学び、消防という仕事に惹かれていきました。

漠然とした消防への思いでしたが、“消防の道”を意識したのは“3.11”やはりこの出来事でした。2011年3月11日、感じたことのない揺れと、毎日放送されるテレビの画面越しに見た、現実とは思えない光景、どれもが衝撃的で不安で眠れない夜をすごしました。遠く離れた東京に住んでいた自分でも心の痛みが増すごとに、膨らんだのは大きなダメージを受けている被災地に直接的な支援をしたいという思いでした。しかし、当時の私には自分から行動するという勇気がなく、自衛隊や消防隊が現地で活躍する姿を見て、自分にはどうすることもできない無力さに、悔しさやもどかしさを感じました。

それから10年、今大学生になりボランティアサークルに入りました。西日本豪雨では、災害救援として私たちは広島県呉市に飛びました。今までテレビ等でしか見えなかった被災地を目のあたりにして、驚きと様々な感情が沸き起こったのを今でも鮮明に覚えています。そこでは、天災という逃れられないものに巻き込まれ、被害を被ってしまう人間の儚さや、未然に被害を減らそうと行動することの大切さも身をもって感じました。災害によって、一瞬で姿を変えてしまった被災地にもそこには必ずあたりまえの平穏な日常生活があったはずで、それは災害が起こってから“かけがえのないもの”だと気づくのだと思います。この災害救援活動を経て、“人々のあたりまえの日常を守りたい”とより強く思うようになりました。

そして、「今の私にできることをしたい！」と思いを抑えきれず、消防団への入団を決意しました。入団してから1年、災害活動の経験はありませんが、地域との様々な関わりを経験することで、まだまだ未熟ではありますが強くやりがいと楽しさを感じています。

学生団員だからこそできること、それは若い力を持って、これからの消防団を活性化させ、新しい発想で改革していくことだと思います。

私はこれからさらに消防団員としての経験と実績を積んで、意欲的に消防団活動に取り組み、防災に関する知識、技術を高め行動することで、学生団員の

リーダーとしてその役割を担っていきたいと思います。

私は、今まで感じたこと、行動してきたことのすべての経験を活かし、一人でも多くのひとの“命と心”を守る消防団員として活躍したいです。

この気持ちや消防団員としてこれから積んでいく経験を、“消防官”という将来の夢を掴む力につなげたいと思います。

父親と子どもを育てる消防団

第六方面支部代表

荒川消防団 団員 平田 敦義

午後11時。消防操法の4番員に選ばれた私の活動は、この時間帯から始まります。その活動とは、我が家のキッチンで「翌日の夕食を作ること」。2018年5月、4番員の私にとって、毎晩11時からの夕食の準備は欠くことのできない大切な活動でした。

操法大会までの1カ月半、仕事を終えて帰宅し、午後7時からの訓練開始までに夕食を作る時間はありません。そこで、前日の夜にほとんど調理を終えておき、翌日、帰宅後すぐに、夕食としてテーブルに並べることにしていました。

「お父さん、今夜も訓練でいないの?」、「カレーとシチューばかり・・・」。子供たちにとってはちょっと不満な夕食が続きます。夕方6時から慌ただしく、それでも「家族で一緒」にテーブルを囲みます。訓練を終えたあとは、学校での出来事を聞いたり、訓練の様子を話したり、活動服も着替えず、子供たちと話をする日々が続きました。

2週間も経つと、「お父さん、そろそろ7時、訓練に遅れるよ!」と言いながら、洗濯した活動服に襟章や階級章を子供たちがつけてくれるようになりました。「今日が本番?頑張ってきてね!」という言葉に見送られながら、操法大会に向かったことは今でも鮮明に覚えています。

私が消防団に入団したのは、ほんの1年前です。母親を病気で亡くした4人の子供たちに、父親の頑張っている姿を見せたい、と入団したのです。ひとり親だからこそ、地域の方と交流して、「いざという時に子供たちに手を差し伸べてくれる知り合いを、一人でも多く増やしたい」そんな願いもありました。

私の所属する分団では、男の子4人を育てる私を励まし、気遣ってくれました。ときには、お菓子やおかずを持たせてくれた方もいます。家庭と職場の2カ所だけで過ごしてきた私にとって、消防団は第三の場所になり、操法の訓練では「今まで味わったことのない一体感や感動」を味わうことができました。このことで、気持ちが前向きになり、子供たちにもおおらかに接することができ、精神的に大いに助けられたことには心から感謝しています。

子どもたちとも消防団や防災の話題が増え、「クラスの友達のお父さんも消防団なんだって」と教えてくれたり、テレビで見た火災や災害のニュースを私に話してくれることも多くなっています。子供たちの防災意識も高まってきているようです。

入団してからのこの一年を振り返ると、消防団での活動や交流が、父親である私と子どもたちにとって、「豊かな日常の一部」になっていることに気づきます。

仕事や子育てが忙しく時間が取れない方は多いと思います。しかし、私の小さな経験から言えることは、消防団の活動から得られるものは、「想像以上に多い」ということです。知識や技能はもちろんのこと、地域とのつながりや家族の絆なども強くなったと思います。お仕事をされている男性、女性の皆さん、子育て中のお父さんやお母さん、学生さんにも、ぜひ、多くの方に消防団の活動を知ってもらいたいと思います。

昨年の操法大会では新入団員にもかかわらず、小さな銅メダルをいただきました。帰宅すると、三男もサッカー大会で金色の大きなメダルをもらってきていました。「チーム全員で頑張った」と誇らしげに私に見せてくれます。私の手元にある操法大会の銅メダルも、「分団全員の努力と家族の協力の結晶」です。この銅メダルは、子供のサッカー大会の金メダルに負けないくらい大きく、同じくらい輝いて見えました。

入団して1年、貴重な経験と大切なものをたくさんいただきました。これからは「地域防災における消防団の役割」について学びをさらに深め、家族も大切にしながら、消防団活動に努めてまいりたいと思います。

消防団員と地域の連携が自治体の未来を創る

第七方面支部代表

江戸川消防団 団員 神尾 昭央

私は、静岡県伊豆市の土肥という町で生まれ育ちました。海と山に囲まれた自然豊かな地域です。鉄道は敷設されておらず、バスが1時間に1本来るかどうかという秘境とも言える地域です。この地域においても消防団は存在しており、私の父も団員のひとりでした。幼少期、歳末の火災特別警戒の際に、自宅の前を通るポンプ車に向かって、手を振るのが毎晩の楽しみであったことを鮮明に覚えています。

大学進学を期に上京し、それ以来、東京都江戸川区に住んでいます。私は、10年前から障がい者支援事業所に勤務をしておりましたが、縁あって政治の世界に興味を持ち、江戸川区議会議員選挙に立候補しました。現在2期目です。公務の傍ら、障がい者支援の仕事も続けており、福祉の仕事も続けており、福祉の現場目線を持つ議員として活動しています。

消防団に入団したのは、今から4年前です。地域の先輩消防団員からお誘いをいただき、入団を決意しました。入団して感じたことは、消防団と地域の関わりが密接であるという点でした。消防団は、それぞれ管轄区域があり、その活動地域が町会自治会と重なるように設定されています。地域の代表として選出されている区議会議員の立場と重なる点も多いと感じました。

昨年10月、台風19号が関東に上陸した際には、私も消防団員として地域の警戒に従事しました。江戸川区は、満潮時の海面水位が地盤よりも高い所謂0メートル地帯が70%を占める自治体です。そのため、区民の皆様の水に対する危機意識も高いという特徴があります。台風19号の接近を前に、江戸川区は他の自治体に先んじて、避難勧告を発令しました。多くの区民の皆様が避難所で不安な夜を過ごす中、地域の消防団員として、随時、河川の水位を観測し各所に情報提供することができたのは、大きな成果でした。

特に、私が関わっている障がい者支援の現場は、災害時には要保護者になる可能性の高い方々が多いのです。そのような方々にも、迅速かつ正確な情報提供ができたことは、障がい者支援事業者勤務し、かつ消防団に入団しているからこそ成し得たことだと感じています。

前述のように、消防団は地域との関わりが密接な団体です。核家族化や高齢化が進む中で、地域コミュニティーが希薄化しています。私は、この課題を解決する糸口は、地域の学校にあると考えています。公立小中学校は、基本的には学区制を採用しています。学校には、その地域に住む子ども達が集まります。必然的に学校行事には、同じ地域に住む者が集まります。その中には、地元の

町会自治会の方々や学校 PTA など、地域コミュニティーの核となる人物も含まれます。また、行政職員、民生児童委員、消防、警察といった公的立場の方々も関わります。学校を中心とした輪の中で、自然と地域コミュニティーが形成され、将来にわたって地域に貢献する力が育まれるのです。この輪の中に消防団も積極的にアプローチすべきです。

すでに、学校の防災訓練に地域の消防団が参加するなどの活動は実施されていますが、さらに一步進めて、地域と消防団が連携する活動を推進していく必要があります。その中から将来の消防団員も育成されると期待しています。消防団と地域の連携が自治体の未来を創るのです。

操法大会で気付いた地域防災力の重要性

北多摩支部代表

国分寺市消防団 団員 角田 賢祐

「活動は1か月に3回くらいだから」

平成27年の冬、私はそう説明を受け、国分寺市消防団第5分団への入団を決めました。

「あと、来年は東京都の操法大会というのがあるけどね」

最後に付け加えられたその言葉の重みを私はもっと知るべきでしたが、その時はあまり気にも留めませんでした。

消防団に少し慣れてきたころ、操法大会の訓練が始まりました。訓練回数は週1回から徐々に増え、内容も厳しさを増していきました。とても1か月に3回どころではなく、これは大変なところに入ってしまったと理解した頃には、後の祭りでした。

しかし、操法の訓練に必死に食らいついていく中で、第五分団の仲間たちとの絆が深まり、また、操法の動き一つ一つが、自分と団員の安全を守り、迅速に消火するための消防活動の基本的かつ重要な要素なのだということがわかってきました。そうして取り組んだ東京都消防操法大会では、仲間たちともてる力を出し切ったという達成感と、もっとやれたという悔しさとが混じった、他では得られないような感覚を味わうことができました。

操法大会の終了後、右も左も分からない新入団員だった私が、曲りなりにも操法大会に出て、消防活動の基本を学び、貴重な経験をすることができたのは、指導や応援等で私たちを支えていただいた、消防署、本団、そして地域の方々の力がなければ実現しないものだったと強く感じました。そしてこれは、日々の消防活動や災害時の対応にも言えることだと気が付いたのです。

日々の消防活動に地域の理解が必要であることは言うまでもありませんが、特に大規模災害時には、行政や消防だけで対応することは困難であり、地域の防災力を発揮することが必要不可欠です。消防白書によれば、阪神・淡路大震災において、生き埋めや閉じ込めの際に救助された方の約98%が、救助隊ではなく、自力での脱出や家族や隣人などに救助されたという調査結果があるそうです。行政や消防の強化とともに、地域の防災力の向上が、大規模災害時でのより多くの人命を救うことにつながるのです。それには、自分たちのまちは自分たちで守るという地域密着の私たち消防団が果たすべき役割はとても重要です。私たち第五分団の担当地域にある高木町自治会は、全国で初と言われる昭和59年に地区防災計画を策定するなど、地域防災力の強化に努めており、そうした長年の取り組みが認められ、平成29年に防災功労者内閣総理大臣表彰

を受賞しています。私たち第5分団も、微力ながら防災訓練での指導等で協力しています。

さて、ここで私事ですが、昨年、第1子を授かりました。

予定日を大きく過ぎ、奇しくも第五分団の先輩と同じ誕生日となったことには、消防団との浅からぬ縁を感じずには入られません。生まれたばかりの我が子を抱くにつれ、この子が育つ未来は、平穏で安全なものであってほしいと強く願うばかりです。

今後30年以内に首都直下地震が起こる確率が70%と言われる中、私の愛する地元とそこに暮らす人々、そして何より愛する我が子を守るためには、地域の防災力の向上は急務です。消防団での日々の活動を通し、地域の防災力の向上に少しでも役に立てるよう、これからも努力してまいります。

本日はありがとうございました。

家族あつての消防活動

西多摩支部代表

あきる野市消防団 班長 木崎 貴之

「よし、やるぞ。」

初めて操法の選手になった私は、無我夢中で訓練に打ち込んでいました。不器用な私のために周りも先に進めず、「水なんか出せないぞ。」と言われ、悔しさを周りへの申し訳なさで一杯でした。

それからは自主練の幕が上がりました。

訓練が休みの日は指揮者、指導してくれる先輩・後輩に電話をし、「また、やるのか。」と言いながらも面倒を見てくれたり、訓練をしていると差し入れをいただく事もありました。

頼めば応えてくれることで、仲間に支えてもらえていると感じ、「もっと、やってやろう。」という気持ちになり、ズボンが擦り切れるまで毎日のように訓練に打ち込んでいました。

操法の訓練期間中に第一子が生まれ、家族といることでも充実していましたが、生まれて間もないこともあり、妻に「子供を抱っこしている時間よりもホースを担いでいる時間の方が長いんじゃないの。」と冗談っぽく言われましたが、上手く笑えませんでした。

訓練中から聞こえた「走れー。行けー。」などの怒号のような叱咤激励は私の背中を押してくれましたが、大会当日は耳に入らないくらいに緊張をして、あっという間に終わってしまい、精一杯やったものの入賞も果たせず、私がミスをしてしまったという気持ちだけが残りました。

その悔しさから、この2年後にも選手に立候補していました。

なぜか、大会のある年に子供を授かり、妻が応援してくれる気持ちで里帰り出産をすることを決め、子供を連れて実家へ帰って行きました。

家族や周りのみんなの支えもあり、前回と同じく訓練にのめり込んでいき、指揮者や指導してくれる仲間の着信履歴は私のもので埋まったのではないかと思います。

2度目の大会訓練中では、確実に家族よりホースを担いでいる時間が長くなりましたが、私の中では一つのことを夢中になって取り組める充実した時間となっていました。

入賞することはできましたが、結果よりも大会に対して私がやれる限り取り組めた事や不器用な私と一緒に選手をしてくれた仲間の存在、指導してくれた先輩・後輩との繋がりを強く感じ、皆が一塊になって行ったことは私の中で大きな財産となっています。

このような経験もあり、家族に「また、消防？どうせ、遅いんでしょ。」と言われながらも、私は消防団活動にはまり込んでいきました。活動に参加することで、先輩からは団活動についてや、実際の経験を教えていただく機会が増え、仲間たちと笑い合いながら過ごせる時間も増えたことで、絆が強くなったことを感じました。

私生活では、消防の仲間と家族ぐるみで遊ぶ機会が増え、家族の消防団への理解もやわらかくなっていきました。

団活動としては、今年の台風のなか、広報活動や土嚢積み・排水作業に始まり長時間の警戒と大変な作業でしたが、今までの経験が活かしている事や仲間たちと過ごした時間が素早い連携にも繋がっていたと思います。

また、私たちが広報を行ったことで「早めに避難ができて助かった。」という言葉や、作業に対する感謝の言葉、浸水に対しての不安が少しでも和らいで見えたことは私が活動に参加したことへの価値を実感し、消防団に入っていて良かった、地域の助けになれたことを誇りにも感じました。

消防団活動に対して不満や不安はありつつも一定の理解をし「気を付けて、頑張る。」と送り出してくれる家族のありがたみを実感し、活動がない時は家族という時の幸せを噛みしめています。団員としては、これからも先輩方から学んだことや自分の経験を後輩に伝えていき、消防団ひいては地域へ貢献していけるよう活動を続けていきたいです。

消防団と家族について

南多摩支部代表

多摩市消防団 団員 柴田 洋佑

私には地元がありませんでした。幼稚園や小学校などの関係で引っ越しを繰り返したり、学校まで電車で通ったりしたので、あまり住んでいる場所に愛着とありますか、根付くものがなかったのです。

特に地元愛がほしいということも考えたことがなく、そんな行動は全くとっていませんでした。

成人式も出たところで友人がいないので欠席し、学校の仲間だけで集まりました。

もちろん、消防団の存在も知りませんでした。

2003年に結婚し、妻の地元である多摩市に引っ越してきました。私にとっては、家族から離れて暮らす初めての土地でした。多摩市で新しい自分の家族を作って

いくんだと、まだこのころは強く感じていませんでした。

初めて多摩市もとい、一ノ宮の魅力に気付いたのはお祭りでした。大通りを盛大に練り歩く神輿、大太鼓、山車。ここまで大きな祭りは身近にはありませんでした。

こんなに楽しい祭りがある街はすてきだなと思いながら子供と一緒にずっとくつついて回りました。でもまだ、知り合いは一人もいませんでした。

子供が保育園に行くようになり、地域に勤務する人と触れ合う時間が増えました。

初めは保育園内であいさつする程度でしたが、駅前ですれ違った時も声をかけていただくことも増えてきて、「あ、普段の生活の中でこういう瞬間、いいな」と思うようになりました。

2人目の子供が生まれ、いつものように保育園に預けたとき、ふとした保育士さんの対応にとっても感動してしまい、「この保育園で働きたい」となぜか思い立ってしまいました。会社に勤める傍らで保育士免許の勉強を始め、3年後に会社を辞め、この保育園で非常勤ですが働いていました。これを機に近所で声をかけてくれる子供が増え、自分の中でもやっと多摩市に根を下ろし家族とともに新しいつながりを作っていきたいと思うようになりました。

地域につながる活動はもっと何かないかと考えていたのですが、なかなか方法が見つからず、ボランティア袋をもらって道の清掃をするくらいしかできないまま1年が過ぎてしまいました。

そんな時、子供の通う小学校のどんど焼きに来ていた消防団を見て（このこ

ろはまだ消防署の人と思っていました)、消防士になるのもいいと思いました。しかし調べると年齢的に無理だとわかり半ばあきらめていたころ、ちょうど近くのデパートで消防訓練のデモンストレーションを実施しているのに遭遇しました。

そこで消防団という地域を守る団体が存在し、しかも募集しているということを知りました。

これは千載一遇のチャンスとばかりに募集用紙をもらった当日に市役所に電話をかけ、入団したい旨を伝えていました。家族も地域に貢献するのでいいのではないかと快く承諾してくれ、晴れて消防団に入団するに至りました。

9分団の方たちはとても親切な人たちで、「よそから来た人間」という意識が強かった私を快く迎え入れ、大変よくしていただきました。また、多摩に越してきたばかりの時に出会ったあのお祭りにも関わっていると知り、あのころから何かの縁がずっとつながっていたのだなと運命的なものを感じました。

それから今年で8年目になりますが、操法の選手をやること2回、出動すること多数。放火のための深夜警戒、巨大台風による河川の警戒など、地域のために様々な活動を行ってきました。時には朝から晩まで警戒に出るときもありました。

深夜に家を出ることもありました。そんな活動を陰で支えてくれたのは家族の存在でした。特に私が活動しているときは、子供3人を任せてしまっている妻には頭が上がりません。妻がいたからこそ、私は全力で消防活動ができていると思っています。

多摩市に移ってきてから16年になります。この地域に住む人間として地域に貢献し、家族の暮らしを守っていくことで、子供たちが多摩に生まれて、住んでよかったなと思えるようになればと願っています。

「我らの島は我らで守る」の言葉を胸に

島しょ支部代表

青ヶ島村消防団 団員 佐々木 祐治

八丈島をへりで飛び立つと次第に青々とした島が見えます。雲間から見える荘厳で凛とした佇まいは、自然そのもので圧倒的な迫力です。それが私の住む青ヶ島です。

青ヶ島を例えるなら、山の頂上を切り取りそのまま海に浮かべた島と言えます。それ故、平地は少なくそのほとんどは山の斜面であり青々とした樹木が生い茂っています。まさに青の島、青ヶ島と言えます。

今日、青ヶ島村も多くの地方自治体と同じく人口減少が顕著です。私は進学を機に島を離れましたが、2年前青ヶ島へ戻りました。私が過ごしてきた頃と比べて、社会インフラ等の整備状況は各段に上がっており、今はより暮らしやすいです。

しかし、それに反して人口は右肩下がりで。島を離れた仲間たちが各々違う場所で頑張っているんだなと思いうれしくもありますが、島に戻ってきた私にとっては寂しくもあります。

そのような思いもあり、島を元気にする、島に恩返しをしたい、島のために私に何ができるだろうかと考えた時、消防団に入ることを決意しました。

青ヶ島村には消防署がありません。火事や地震など有事の際は消防団がその重責を担うこととなります。

昨今のニュースで火事等の報道があると、いかに初動が大事かということに気づかされます。

どのような装備、機材があっても初動が遅かったり誤った対応すれば被害は拡大してしまいます。消防署のない青ヶ島では消防団が有事の際に初動を担う団体です。そのようなことから、消防団の活動を通して島に貢献することができるのではないかと考えたからです。

昨年のラグビーワールドカップで日本代表の躍進は大いに話題になり、また私たちも勇気づけられたことだと思います。そのラグビーの精神を表す言葉に「one for all、all for one」があります。「一人はみんなのために、みんなは一人のために」。

私の消防団員としての活動にも通じる言葉です。私一人は非力です。しかしそれでも、村民のため仲間のために働くという強い意志のもとで、「私は消防団のために、消防団は団員のために」ということが成り立つのではないのでしょうか。

そのために、年2回の教育訓練には必ず参加し、少しでも最新の術を学ぶべ

く、座学では常に最前列で受講しています。また、実技では有事があった際に滞りなく操作ができるよう訓練所の教官に積極的に質問し練習しています。

その他、気になることがあれば e ラーニングを用いて確認します。e ラーニングにより、離島といった環境でも情報弱者になることもなく内地の消防団の方々と同じような知識を得られていると自負しております。

そして、私が消防団員として勇壮活発であることは、島民や島を離れた仲間にも届くことでしょう。私が各地で活躍している仲間に元気づけられたように、島外の仲間、青ヶ島村民の方たちにも元気を送れることと信じています。

「私は村民のために、村民は青ヶ島の仲間一人ひとりのために」。私のトライに終わりはないです。「我らの島は我らで守る」の言葉を胸にこれからも一生懸命にトライし続けます。